

以森伝心

理事長 柏原康夫 筆

第 15 号

2011 年 11 月

特集：インタビュー

「食文化と森」 株式会社 紫野和久 傳
桑村 綾 氏

森林に関わる人々 第5回

森林で活動する人々②

森と木のナルホド講座 第11回

里山林の再生

チーム以森伝心ニュース

ペレットストーブの魅力



京都の森を守り育てる運動に参加しませんか

株式会社 ^{むらさきのわくでん} 紫野和久傳
^{くわむらあや} 桑村 綾氏

もり 森林をつくることそれが必然でした

森林や里山がもつ本来の機能を取り戻すために、照葉樹の苗木を植樹する活動は、各地で広がりを見せています。しかし、そうした「再生」のためではなく、工業団地の一角に文字通り「一から」つくった森林が、京都府京丹後市にあります。森林づくりに込められた想いを、老舗料亭「和久傳」の大女将・桑村綾さんにうかがいました。

京都府京丹後市久美浜町。町を貫く幹線道路である国道 312 号の脇に工業団地が広がる。電子部品製造やステンレス研磨加工など、いわゆる「工業団地」のイメージどおりの工場が建ち並ぶなか、工場 2～3 棟に相当する広さに生い茂る「森林」が目を引く。

「どうです？ 4 年でこんなに生長したなんて、びっくりされるでしょう。一般には、植樹してから森林が出来るまでには百年かかるといわれていますが、私たちの森林はご覧のとおり。膝丈くらいだった苗木が、4 年を過ぎた今では樹高が 4～5 メートルにもなりました」

まるで、我が子の成長を喜ぶかのように目を細めて語る桑村綾さんが、ここ谷工業団地に 8 千坪を購入したのは、平成 18 年のこと。東京や名古屋の店舗で扱う和菓子や弁当などを加工する食品工房を建てるためであった。

「工房自体は 500 坪くらいの建物なので、必要な広さとしてはせいぜい 1～2 千坪でした。しかし、取り扱うのが

食品なので、隣接して建つであろう工場からの影響は、その安全面からも極力受けないようにしないといけません。もちろん私どもの工房が、食品加工の臭いで周辺にご迷惑をかけてもいけません。そうしたことから、土地をまとめて購入することにしました」

購入はしたものの、広大な余剰地の活用法を考えなければならぬ。畑にしようか、あるいは東京・丸の内の街路樹のように仕立てようか、いろいろ考えあぐねているとき、偶然、苗木から森をつくる「いのちの森づくり」活動をテレビで知った。

「いのちの森づくりは、潜在自然植生という理論に基づいて植樹していくんですが、その考えに何かインスピレーションのようなものを感じました」

「潜在自然植生」とは、植物生態学上の概念で、混植・密植することで木々に競争をさせ、自然淘汰を経て森をつくり出そうというものだ。近年、宮脇昭氏（横浜国立大学名誉教授・財団法人地球環境戦略研究機関国際生態学センター長）が取り組み、実践している。

知人に紹介を依頼、すぐに研究室に電話を入れ、30 分経つか経たないかで宮脇氏を訪問した。その出会いが平成 18 年 8 月。久美浜工房で「いのちの森づくり」植樹祭を開催したのが翌 19 年 5 月。「やる」と決めてからの行動は早かった。





くわむら あや
株式会社紫野和久傳 代表取締役社長 桑村 綾

昭和 15 年、京都府宮津市生まれ。昭和 39 年、丹後の老舗旅館「和久傳」に嫁ぐ。昭和 57 年に京都高台寺に料亭「和久傳」を開業。平成 15 年、峰山の旅館を閉鎖。料亭部門と物販部門を分社化。平成 20 年から京丹後市久美浜町の谷工業団地に食品工房を建設。平成 19 年 5 月、工房の敷地内で植樹祭を行い、「和久傳の森」を育て始める。

平成 21 年からは、「本物の人づくりは、子どものうちから時間をかけてやらねば」という思いから、隔月最終日曜日に京都市内と久美浜工房の 2 階で「こども論語塾」を開催。講師は、全国をめぐる「論語」を教える安岡定子さんに依頼。「何でもタダで手に入ると考えるようになってはいけない」と、子どもたちに森の草引きをしてもらうことで参加費を免除する仕組みに。

「木を植えることは、心にも木を植えることだ、と先生はおっしゃられますが、実際にやってみて、その言葉がよく分かりました。植樹祭で、10 本 20 本と木を植えていくなかで、心が清々しくなる自分に気づいたのです。植樹祭に参加してくれた方々の心にも木が植えられたようで、植樹後もこの森を気にかけてくださっています」



苗木を一本ずつ丁寧に植える

植樹祭には、和久傳の従業員や地元をはじめ新聞広告や雑誌での呼びかけで全国から集まった人々を含め約 1600 人が参加



和久傳は、明治 3 年に、丹後縮緬ちりめんの一大集散地として栄えた峰山(現 京丹後市峰山町)で旅館として創業。行商人など多くの人々が往来、彼らの定宿として和久傳も大いに繁盛した。

桑村さんが嫁いだ昭和 39 年の頃にも縮緬産業は、まだ栄えていたが、昭和 50 年代中頃から徐々に下火となり、それに伴い丹後随一の老舗旅館と謳われた和久傳も火の車になっていった。若女将の桑村さんも、旅館の立て直しに奮闘するも縮緬産業の衰退には勝てず、峰山の旅館は残したまま京都に料亭を出店することを決意。昭和 57 年に京都高台寺に料亭「和久傳」を開業する。「素材のよさを生かした料理を出したい」と割烹のコンセプトを料亭に持ち込む。その味は瞬く間に受け入れられ、高台寺に続き室町にも料亭「和久傳」を展開。今日の礎を築くが、桑村さんの試みは料亭に留まらない。四季折々の料亭の味わいを「おもたせ」として提案。物販専門の別会社「紫野和久傳」を設立する。

「これからの時代は生産から販売まで、すべての工程を一貫して行う『六次産業』を私どもは手掛けたいと思っています。自分たち自身が納得できる食材を使うためには、どこでどう作られているのか生産にまで気を配るのは当然のことだと考えています」

「六次産業」という言葉は、一次産業者が、二次産業、三次産業の付加価値をつけた経営活動を行うことで、一般的には農業生産者が主体になって生産から加工、流通までを手掛けることを指す。ところが桑村さんはその逆で、販売から遡って加工、生産へ展開するという。久美浜での食

品工房開設もこうした流れの上にあったが、そこにはもうひとつ、大きな理由があった。

和久傳が着実に京都での躍進を続ける一方で、峰山の旅館は、結局平成 15 年に閉鎖することに。創業 130 年、峰山の象徴だった旅館をたたむことを耳にした地元では署名運動が起きる。

「2 千人もの人が旅館の存続願いを出してくれたんです。その時に『いつか必ず戻ってきます』と地元の方々と約束しました。それからずっと気持ちの中に丹後のことがありました。旅館から工房へとかたちは変わりましたが、久美浜工房の開設で、ようやく約束が果たせたように思います」と語る一方で、一連の活動は決して慈善事業ではないと言い切る。

「『和久傳の森』も、地球環境のために森林をつくったのだという気負いは全くなく、そうすることが必然であり、行動に移したのが私だった、ただそれだけのことだと考えています。現在も、森林が育っていくなかで新しく見えてくるのがたくさんあります。そうした、自分の内側から聞こえてくるインスピレーションのような感覚を、素直に実践に移していくことが、和久傳の今後のすべてに通じていくように思います」

目先の損得に執着しては聞こえない「内なる声」。その「内なる声」に耳を傾け、老舗旅館から料亭、六次産業化、いのちの森づくり……社会や時代のニーズを先取りするかたちで展開してきた桑村さんが担う次なる役目は、「森づくり」を通じた「本物の人づくり」なのかもしれない。

もり 森林に関わる人々

かつて、森林が元気だった頃、人々はさまざまなかたちで森林と関わっていました。食事の炊きかきにする薪を集めたり山菜を採ったり、あるいは狩をしたりと、どの家庭も森林との関わりの中で暮らしていました。

そして現在。「森林の大切さを見直そう」「美しく豊かな森林を取り戻そう」という気運が高まってきましたが、人々はどのように森林と関わっているのでしょうか。

当コーナーでは、森林に関わる人々について紹介します。

第5回 森林で活動する人々②

「森林で活動する人々」シリーズでは、環境や生物多様性の保全、文化・教育・レクリエーションなど、さまざまな観点から森林整備・保全活動を行っている「団体」と「人」にスポットを当てて、紹介してまいります。今回は、平成23年に京都府環境保全功労者に選ばれた「間伐材研究所」です。

NPO 法人間伐材研究所

「間伐材研究所」は、間伐材の有効利用をテーマに平成14年に綾部市で発足したNPO法人で、現在会員数は約70名。毎月第1日曜日に定例活動を開催し、森林整備、間伐した木の搬出、間伐材の加工を行っています。

また、年4回発行の機関紙を通じて、国内の木材が活発に利用される仕組みや林業再生の足がかりを模索。森林や間伐材の持つ可能性を研究し、その魅力や森林の現状をおもに都市部の多くの方々に伝えることにより、山間部と都市部との意識の格差を縮めることを目指しています。

活動の内容

① 森林整備

森林の持つ機能を回復させるため、綾部市内のフィールドで間伐など森林整備活動を実施。森林に入ることは森の現状を知る機会にもなります。



せせらぎの森での間伐・搬出

② 間伐材搬出、ものづくり

間伐した木材は自分たちで搬出、階段やツリーハウス、治山ダムに利活用するほか、コースターや棚、椅子、置き物の材料にも使います。加工には、チェーンソーや電気カンナ、ドリルなどの工具を利用、自分たちの手で仕上げていきます。完成した作品は、毎年11



ソーソーやコースターを制作

NPO 法人間伐材研究所では、会員を募集しています

NPO 法人間伐材研究所では毎月第1日曜日、綾部で森林整備や間伐材搬出、ものづくりなどの活動を行っています。

また、機関紙「間伐材新聞」の作成や特別活動などを行っています。興味のある方は、右記までご連絡ください。

月に開催される「綾部市産業まつり」にて展示・販売します。

③ 機関紙「間伐材新聞」の発行

発足時から年4回発行。間伐材研究所の活動報告や、間伐材を使った全国各地の取り組み事例、林業を取り巻く現状や木材に関する基礎知識のコーナー、森林に携わっている方々を紹介しています。

間伐材は「やま」と「まち」をつなぐツール

私たちの活動の目的は、「やま」と「まち」を繋ぐことです。現在、森林は非日常の存在になり、「まち」から遠ざかってしまっています。「まち」に住む人々に森林や林業の問題に気づいてもらうこと、それによって日本の木材が「まち」中で使われることを目指しています。間伐材は、森林の分身として「まち」に入り込み、「やま」からのメッセージを伝える存在なのです。

実際に「やま」と接していると、その面白さはとどまるどころを知りません。「間伐をした木材をどう利用するのか」「厄介者というレッテルをはられた木が、どんな作品に生まれ変わるのか」など、その面白さをより多くの人たちに伝えることにより、「やま」と「まち」の距離を埋めていきたいと考えています。

自分たちの関わった間伐材を最後まで見届けたいという願いもあります。それぞれの木の物語の続きを見届けことが、次の活動の大きな原動力になります。木材を使うライフスタイルが再び始まり、もう一度林業が成り立つ日まで、活動は続けていきます。



幹田秀和(みきたひでかず)

NPO 法人間伐材研究所代表。環境計画のコンサルタント会社に勤務時、間伐材利用の案件を担当。間伐材の可能性とその魅力に惹かれ、当研究所を立ち上げる。平成23年、団体として京都府環境保全功労者に選出される。

連絡先：NPO 法人間伐材研究所

〒623-0037 京都府綾部市並松町上溝口20-3
(綾部NPOセンター内)

TEL：090-9540-0937 (幹田) FAX：0773-43-0463

HP：http://kanbatsu.sakura.ne.jp/

平成 24 年春、西日本で唯一の 林業専門の大学校開校

府内の林業従事者は平成 21 年時点で 660 人と昭和 40 年代初めに比べると 5 分の 1 程度となっています。国産材の需要は低迷し、林業をとりまく環境は依然としてきびしい状況ですが、戦後、政府の主導で昭和 20 年代に植林されたスギ・ヒノキなどが伐採期を迎える中、持続的な林業経営を担う人材の育成が課題になっています。そこで注目を浴びているのが、平成 24 年 4 月に開校する、京都府立林業大学校です。

即戦力として活躍できる人材の育成を目指す

この大学校は京丹波町本庄に開校、西日本で唯一の林業専門の大学校になります。実践的な技術・知識を身につけて第一線で活躍できる人材、森林保全活動から野生鳥獣害対策まで幅広い地域活動を支える公共人材、森林組合等林業事業体の経営力の向上を支える人材の育成を目指します。

注目される取り組み

高性能林業機械の本格的な技術研修が全国で初めて行われます。これまで人力で行っていた伐採木の集材や整理などを、安全で効率的に行うことができます。また京都府独自の資格としては、「高性能林業機械操作士」、「森林公共政策士」を取得することができます。

目的に応じて学べるカリキュラム

2 年制の「森林林業科」と、短期間で学ぶ「研修科」の 2 つの学科で構成されています。

森林林業科では、1 年目に基礎知識を学び、2 年目には、林業実習をする「林業専攻」か、森林や林業の知識を地域活性化に生かす「森林公共人材専攻」を選びます。

研修科は、社会人や一般の方々が目的に応じて短期間で受講できる(年数回～3 ヶ月)プログラムを提供します。

一般入学試験日程(森林林業科)

	前期	後期
出願期間	平成 23 年 12 月 1 日(木) ～ 12 月 15 日(木)	平成 24 年 1 月 31 日(火) ～ 2 月 7 日(火)
試験実施日	平成 24 年 1 月 16 日(月)	平成 24 年 2 月 13 日(月)

お問い合わせ：京都府林務課 企画・経営担当(TEL：075-414-5016 FAX：075-414-5010)

京都府立林業大学校

森林林業科 就業を目指す 2 年間のコース

- **林業専攻** 《講義と実践の組み合わせ》
実践的な林業技術や経営を習得し次世代の林業を担う人材を育成
- **森林公共人材専攻** 《大学の講義と連携》
里山の保全活動や木の文化の継承など様々なスタイルで森林に関わる人材を育成
——— 高校新卒等の就業希望者向け

研修科 働きながら学べる社会人のためのコース

- **林業トレーニングコース** 《林業を仕事にしたい》
早期就業を目指して林業の実践技術を習得
——— 就業希望者向け
- **経営高度化コース** 《経営力を高めたい》
企業的な経営展開に必要な経営実学、技術を習得
——— 森林組合や林業事業体に勤務の方向け
- **森林保全・鳥獣害対策コース**
《森林保全・鳥獣害対策に取り組みたい》
現場で実践的に役立つ知識や技術を習得
——— 市町村職員・ボランティアの方向け
- **森と木の文化コース** 《森や木の知識を深めたい》
連続講座や特別講演、フィールドワークで森や木、建築を深く学習
——— 市町村職員、ボランティア、一般の方向け

ジャケットとかばんは スペシャルコラボレーション！

「森林林業科」の生徒が実習時に着用するジャケットとかばんはデザイン性・機能性ともに優れたブランドが採用されています。ジャケットは大手アウトドアメーカーの「モンベル」。薄暗くなった屋外でも発見しやすいように、背面には黄色い反射材を張り付け、安全面にも配慮されています。

肩掛けかばんは、希少ブランドかばんとして全国的な人気を誇る「一澤信三郎帆布」です。色合いがモスグリーンで「一澤信三郎帆布」おなじみの商標も付いています。



森と木の ナルホド講座

監修：京都モデルフォレスト協会

陸地面積の7割近くを森林が占める日本。

しかし、木材価格の低迷や林業採算性の悪化に伴い、間伐などの必要な整備が遅れた森林増加が大きな問題となっています。

こうしたなか、里山林の再生が大きな課題となっています。

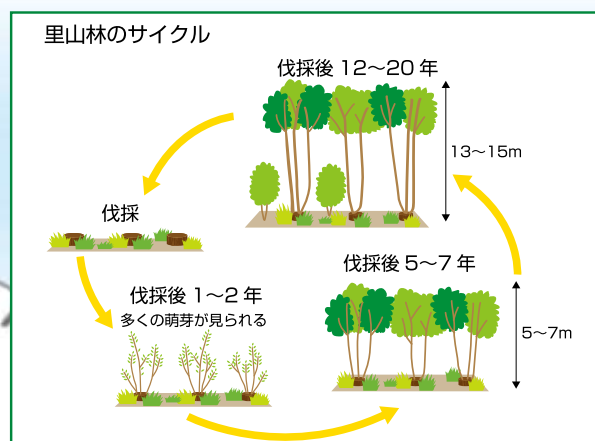
第11回：里山林の再生

里山林の役割と特色

里山林とは、里山の中でみられる林のうち、おもにクヌギ・コナラなどからなる落葉広葉樹林やアカマツ林のことをいいます。奥山ではなく人の住む集落の近くにあり、われわれの生活に不可欠な薪・炭などの燃料や落葉などからできる農業用の有機肥料、食糧採取の場として活用されてきました。人々の生活と密接に結びつき、人が恵みを得るために入ることが林の保全・維持につながるという、まさに理想的な関係でした。

また、里山林では木が大きくなると常緑広葉樹や笹が増え、林は暗くなり、生き物が少なくなってしまう。そうさせないために、一定のサイクルのもと、木を伐採していました。

木を伐採することも、里山林を維持する重要なサイクルの一部だったのです。



里山林の再生に向けて

しかし、高度成長期以降のライフスタイルの急激な変化に伴い、薪・炭などの燃料や農業用の有機肥料などを里山林から得る必要がなくなりました。そのため、里山林の大切さは忘れられ、人々の生活とも関係が希薄になりました。その結果、「手入れ不足の里山林の増加」「里山林自体の減少」など、里山林を巡る状況は悪化の一途を辿ることとなったのです。

そして現在、人と里山林の関わりに危機意識を持つ人々も増加、里山林を再生させる活動も活発化しています。その活動の多くは昔のように里山林で生活を支えるというよりは、「自然環境保全機能」「景観保全機能」「伝統的生活文化保全機能」「自然とのふれあい機能」「災害抑制機能」など里山林の他の側面から、その保全・維持の大切さを一般に広めようという動きです。できるところ、身近なところから取り組みが始まっています。

時代の変遷と共に人と里山林のありかたにも変化が生じていますが、人が関わり続けるということが重要なのです。

チーム以森伝心ニュース

「チーム以森伝心」メンバーがレポートします！

「京都ペレット町家ヒノコ」に聞く、ペレットストーブの魅力

『木質ペレット』。最近、新聞などでよく目にするようになった言葉ですが、木材を圧縮加工して作られた粒状の燃料のことです。ストーブやボイラー、料理用のグリルの燃料として利用されます。

京都市の委託を受け、木質ペレットの普及促進事業を行っている「京都ペレット町家ヒノコ」の中園さんにペレットストーブの魅力について取材しました。

「美しい炎と優しい暖かさが魅力の薪ストーブの燃料を、木質ペレット専用に変えたものがペレットストーブです。もちろん、このペレットを薪ストーブの燃料としてそのまま利用することも可能ですが、ボタンひとつで着火や消火ができ、室温の自動調節からタイマー機能、さらには、燃料のペレットを自動供給できるものなどペレットストーブ

には、薪ストーブとはちがった様々な機能が付加されています。また燃焼効率がよく煙突が不要なため街中での利用も可能です（電源が必要です）」と中園さん。

京都府の森林面積は全国平均よりも高いのですが、様々な理由で森に人の手が入らず林業の危機を迎えています。100%京都産の間伐材や端材を原料とする「京都ペレット」の普及が、地元林業を活性化し、さらにはエネルギーの地産地消にもつながることが期待されます。冬の到来と共にペレットストーブの認知度がもっと高まると思います。（前田 拓）



ペレットストーブについて語る
「京都ペレット町家ヒノコ」の中園さん



ペレット各種。原材料により
いろいろな種類があります

「京都ペレット町家ヒノコ」は、木質ペレットを使った環境にやさしい暮らしの提案をする場として、2010年5月にオープン。炭や薪などを含めた木質バイオマス利用の情報発信や、森林を取り巻く人たちのための交流拠点を目指します。火や木の関連グッズ、炭グッズの販売も行っています。



京都ペレット町家ヒノコ

京都市中京区寺町二条下ル榎木町 98-7

TEL : 075-241-6038

H P : <http://www.hibana.co.jp/kyoto-pellet/>

見学に行ってきました！エコハウス2

家造りの主流が棟梁、大工、左官、畳職人などの専門職人の技の組合せから、ハウスメーカー中心へと代わってすいたちます。筆者が小学生のころ、学校から帰ると近所の建築現場で大工さんが鉋がけや鑿^{のみ}使い、畳職人の肘を使った独特の畳表の縫込み作業などを飽きずに眺めていた記憶がありますが、現在では工場でプレカットされた材料が、現場で機械的に組み立てられます。

『京エコハウス』は、省エネが売りのモデルハウスですが、以森伝心としては、その性能もさることながら、使用されている素材の方に注目したいと思います。モルタルリシン吹き

付けに窓枠はアルミサッシと外見は何の変哲もない今時の普通の家ですが、中は木の存在感に圧倒されます。一階はヒノキ、二階はスギと共に無垢材が張られています。一階はテーブルや応接セットなど重量のある家具を

使用、二階は床に直に座ることを想定し、あえて素材を変え、その質感を大切にすることが想像されます。柱と梁は全てスギ材で、玄関近くには北山杉のみがき丸太が京

都らしさを演出してくれています。壁は珪藻土の左官仕上げで、室内の空気を優しく浄化してくれます。

同行した小学生二人が、「わーっ、きもちいい。このままここに住みたい」「もう帰るのいやー！」と無垢材の床に寝転がったまま動かない姿が、この家の魅力の全てを物語っているように思います。

豊富で質のよい京都府産の木材を建築用材として、適正価格で流通させる地産地消システムの広がりが、京都の森林保全に繋がるということをもっと多くの人に知っていただきたいと思います。（森 稔）



活動報告

株式会社カシックスと協定締結

平成23年10月19日、株式会社カシックスの社会貢献活動等の一環として行う森づくり活動に対して、せいか里山の会、精華町、京都府及び当協会がモデルフォレスト運動の推進と森林の公益的機能の増進を図るため、協定を締結しました。精華町内のせいか交流広場を活動の拠点に、森林整備活動を実施します。



『水都おおさか森林の市 2011』に参加

都市と森林を結ぶ川の役割や、森林や林業の大切さや木材利用の意義を広く知ってもらうため、10月8日、9日、毛馬桜之宮公園（大阪市）で、『水都おおさか森林の市 2011』が開催されました。淀川流域で活躍する団体等が多数集まる中、ブースを出して活動をPRしました。

天候にも恵まれ、たくさんの来場者にモデルフォレスト運動について知っていただくことができました。



国際森林年の記念イベント開催

国際森林年の記念イベント「森を語る～以森伝心」を、8月27日、京都府立植物園で開催しました。



基調講演は屋外で行い、参加者は植物園の空間を満喫しながら宮城泰年氏（本山修験宗管長、聖護院門跡門主）のお話を耳を傾けました。

その後、場所を植物園会館へ移動し、窓越しに比叡山を望みながら宮城氏、只木良也氏（国民森林会議会長、名古屋大学名誉教授）、高原光氏（京都府立大学大学院教授）に鼎談していただきました。



名栗師の原田氏が「森の名手・名人」に認定

国土緑化推進機構が林野庁と共催で行っている「もりのくに・にっぽん運動」の「森の名手・名人」に原田貞夫氏（京都市在住）が認定され、10月31日、認定証の交付式が行われました。氏は、数少ない名栗丸太加工技術の継承者で、その作品は京都御所や金閣寺などの文化財でも使用されています。

※「名栗」とは、栗の木を鋸で刻む加工技術で、数寄屋建築等の伝統的な建築物などで好んで用いられる意匠加工のこと。



発行：公益社団法人 京都モデルフォレスト協会

入会案内資料をご希望の方は、ご連絡ください。

〒602-8054 京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町 104-2 府庁西別館内
TEL & FAX 075-414-1270 E-mail kyomori@kyoto-modelforest.jp
URL <http://www.kyoto-modelforest.jp>
2011年11月発行
企画・編集：自然堂（じねんどう）株式会社



この印刷物は、有害な廃液を排出しない水なし印刷を採用しています。また、大豆油インキを包含した植物油インキと適切に管理された森林の木材を利用したFSC認証用紙を使用しています。